

道志川の夏

東日本大震災発生から半年近く経ちましたが、復旧、復興への困難な道を歩んでいる被災地の皆様にご心からお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

どれだけ時間が過ぎても、地震と大津波という自然災害に見舞われ、さらに原発事故、放射能汚染に遭われた方々の心の傷が癒えることはなく、また、生活再建のために多大なご苦労を重ねていらっしゃると思います。外から心配するだけの私にはわずかな寄付をすることしかできませんが、あらためてお見舞いの気持ちを表したいと思います。

今年の夏、道志川下流の三太旅館の神保さんから「川辺に蛍が出ているよ」とお知らせをいただき、早速見に行きました。

清流という評判の高い道志川ですが、一時はずいぶん水が汚れ、とても蛍とその餌になるカワニナが住める場所ではなくなってしまいました。それでも、護岸工事などが進んだおかげで、川の水がずいぶんきれいになったのではないかと思います。私が河原に立ったとき、川面には涼しげなさざなみが立ち、早くも空には月がかかっていた。6月下旬で薄明かりが長くつづきましたが、夕暮れが深くなるにつれて小さな光が川の対岸あたりを一瞬照らすようになりました。次第にその数が増え、細い糸のような光が明滅します。ついたり消えたりしながら水の流れの上を舞う蛍の姿はとても幻想的でした。

蛍には幼い頃から親しんできました。子供のころ、初夏には家の中から畑を見ると蛍が飛び交うようすが目に飛び込んできました。しかし、今ではすっかりその姿を見ることはなくなりました。ですから、道志川で見る蛍はひととき印象に残るものでした。道志川下流の三太旅館のあたりは自然そのままの景色が残っているだけに、夕やみの中を蛍が飛ぶようすは、いかにも「三太旅館」の舞台にふさわしい情景に思えました。今でもこのような懐かしい光景を見られることに感謝したいと思います。

私の住んでいる寸沢嵐地区からは離れていますが、同じ道志川の中流にあたる青野原地区では毎年夏に、中道志川鮎まつりが行われます。青野原産の鮎は、江戸時代に将軍に献上されたことで有名です。今は、河原の近くに地元の人たちが経営するオートキャンプ場があり、初夏から秋にかけて多くの人たちでにぎわってます。

今年のお祭りは7月10日に行われました。会場へ行った人の話では、中学生の器楽演奏や地元婦人会の踊り、太鼓の演奏などで盛り上がり、子供たちが川の生き物を調べながらはしゃぐ姿が見られたそうです。もちろん、鮎釣り大会も行われました。楽しいイベントを通じてふるさとの川を多くの人に知ってもらい、親んでもらおうとする地元の方々の努力は大切なものだと思います。この催しが長く続くことをお祈りしています。

その一方、毎年8月1日に実施されていた相模湖湖上祭花火大会は中止となりました。相模湖のいちばん大きなイベントであり、関東でも有数と言われる花火大会でした。50年以上続いた夏の観光行事でもあります。名物の尺五寸玉やナイアガラの滝が見られないのを残念に思う人たちは多いと思います。しかし、東日本大震災の被災地のことを思えば、中止になったのは仕方のないことでしょう。被災地の復興が進み、復興を祝う花火大会が相模湖で開かれる日が来ることを心から願っています。

今年の夏は節電の夏です。山間の集落に住んでいる私たちにも節電の意識は高まっています。私も自然な涼しさを確保するため、団扇やすだれや打ち水といった昔の人の知恵を生かす工夫をしています。夏が過ぎたとき、節電が私たちの社会にどんな影響を与え、人々の暮らしをどう変えたかがわかるでしょう。節電の効果のほどが分かれば、自分たちの生活がどれほど電力を過剰に使っていたかを知ることでもできるはず。そして、自分たちの生活のありかたを見直すことにもつながるでしょう。いずれにしても、節電に努めることが、地震と大津波、そして原発事故に見舞われた被災地の方々と私たちとを結びきずになると信じています。2011年の夏は多くの日本人にとって、節度のある生活とはどういうものかを考える季節になったと思います。

被災された皆様のご苦労が一日も早く軽くなり、以前の生活に戻ることを重ねてお祈り申し上げます。

平成23年7月30日